

蛙にも似たオオヨシキリの鳴き声にまじって、ひときはやさしいコヨシキリのさえずりも聞こえる。声につられて、その姿を探すと、雀より一まわり程も小さく、白い眉をもったコヨシキリを見つけたことができた。

今、たんぼは田植えの真っさじ中である。土手の両側には、おとなの胸程も草が生いしげり、何ともいえないうまいにおいがする。ノバラの白く咲きこぼれているさまや、ノイチゴのまだ固い蕾の中から、濃い赤紫の花弁がほんのちよつとのぞいていたり、キュウリグサの淡い水色の可憐な花を見つけたりと、何とはなく、胸の奥にあるなつかしさがよみがえってくるのはなぜだろうか。

田の中にヒバでもあろうか、立木に囲まれた一軒の家があった。その家の物干が畑の中にあつて、その柱の上にモズが二羽、かわるがわる飛んできては止まる。去年の秋に、あの高い木のいただきに止まって、あたりをへイゲイしていた立派さからくらべると、何とはなく家庭的で愛らしく見える。奥井さんのご主人が「オスがメスに餌をやつたよ。」といつていらつしやつた。今頃になると、あの空気をひきさくような鋭い鳴き声は立てず、ただ黙々と巣を作り、ヒナを育てるのだという。

しばらく立ち止まつてモズに見いる。何やら白いものを喰えてきて、自分の足もとにポトリとおいた。ヒナの

ふんだと先生の説明がある。モズのヒナは親鳥に餌をもらつたときだけ、ふんをする。それも、お尻を上にあけて、巣のへりにポトンと落とす。親鳥はそれを喰えて外に捨てる。決して巣を汚したりはしないのだそうだ。先生は、そのふんをとつてきて見せてくださった。透明なゼリー状のものにくるまつて、まるでお菓子のカズザクラを小さくしたようなものだ。これならクチバシにはつかないだろうと感心する。

「あの辺にきつと巣があるに違いない。」といつて先生は、田の中に探険に出かけた。案の定、家を囲む木立の中に、おわんのような巣を発見、ヒナが二羽も首を出していたとか。それを聞いて、われもわれもと田の畦を走る。時ならぬ騒々しさに驚いて、ヒナは首をひっこめてしまつたが、頭よりわずかの枝にワラでできた巣があった。

川もいよいよ終わりに近づいて広々とした霞が浦が見える。河口近くで、オオバン、バンのおよぐ姿を見た。頭上をカルガモがゆつくり通り過ぎる。遠く湖水の上にユリカモメが白いシルエットを見せる。

霞が浦に出る。日がさしてきて暑くなった。湖水の中に立つ棒杭の上にコサギの純白な姿を見つめる。クチバシが長く、足がわずかに黄色いこの鳥は水の面をみつめ